

ソフトウェアの「自由」や「オープンネス」の客観的定義とその変遷

○八田真行、Masayuki Hatta

Keywords : オープンソース、オープンスタンダード、フリーソフトウェア、ソフトウェアの自由、オープンイノベーション

1 目的

GNU/Linuxをはじめ、自由な（フリー）ソフトウェアやオープンソース・ソフトウェアが一般にも身近なものとなって久しい。社会科学の対象としても広く研究されてきた。しかし、「伽藍とバザール」(Raymond 1999)のようなソフトウェアの開発過程に対する興味や、GNU GPLの著作権法や特許法における位置づけ等が盛んに研究される一方で、そもそもソフトウェアが「自由」、あるいは「オープン」であるとはどういうことなのかについては、所与として話を進めてしまうことが多く、議論されることがあまり無かったように思われる。そこで本研究では、ソフトウェアの「自由」や「オープンネス」が具体的にどのようなものとして理解、定義され、それが時間の経過と共にどのように変化してきたのかを明らかにすることを目的とする。

2 方法

この種の議論は結局コミュニティが共有する規範や価値観を何らかの形で測定、可視化するということに帰結し、通常は研究が非常に難しい。しかし自由なソフトウェアやオープンソースの世界においては、様々なオープンソース・ソフトウェア・ライセンスやガイドライン等といった形で規範がコード化されており、それらの策定過程も何らかの形で明文化されていることが多い。ゆえにこれらをたどることで、「自由」や「オープン」のある程度「客観的な」定義が可能となる。

3 結果

調査・分析の結果、本研究では、「パーミッションレスな再配布」と「オブジェクトコードとソースコードの完全な同一性」を保証することがソフトウェアの「自由」の具体的内容であったことを主張する。自由なソフトウェアとオープンソースの違いは、この保証が永続的なものか、一時点におけるものかの違いに帰結する。また、クラウドやウェブサービスの普及のような技術的進歩により、論点としての重要性が次第に前者から後者へ移りつつあり、そのことがライセンス等を巡る議論にも影響したことを示す。

4 結論

本研究により、従来は漠然としたスローガンのように捉えられてきた「ソフトウェアの自由」や「オープンネス」といった概念を、より具体的に把握することができ、また Reproducible Builds のような新たな動きも整合的に解釈することが可能となった。

【主要参考文献】

Raymond, E. (1999) <https://doi.org/10.1007/s12130-999-1026-0>

Tiemann, M. (2005) <https://doi.org/10.1016/j.csi.2004.12.003>